



シェラン島で発見された民族移動期のブラン
テアット (K. Hauck, *Die Goldbrakteaten der
Völkerwanderungszeit.* Bd.1-3, München, 1985, S.
57.)

もう一つは政治地理的な側面である。これには二重の意味があり、一方では北海とバルト海とをつなぐ位置、つまり北ヨーロッパと東方世界の結節点であったという点、他方ではローマ帝国以来、文化的先進地であった大陸ヨーロッパ世界と境を接していたという点である。

したがって、ヴァイキング時代以前のデンマークは、決してヨーロッパ文明から隔絶された僻遠の未開地であったわけではない。ローマ時代には少なからぬスカンディナヴィア出身者がローマの軍隊に採用されていたし、民族移動期にはローマのメダイヨンを模したブランテアットと呼ばれる装飾品がデンマークでも大量に製造された。そして近年の研究によれば、メロヴィング時代になると、グズメリロンボー複合遺跡に代表される、大陸世界との交易を営む商業中心地が、デンマーク各地に成立していたことが明らかとなりつつある。デンマークは、北ヨーロッパ世界の一セクターとして、ヴァイキング時代以前も確実にその役割を果たしていたのである。

しかしながら、彼らデンマーク出身者（デーン人）の活動が活発化するのは、九世紀を迎えてからである。いわゆるヴァイキングの襲撃である。ノルウェー出身者がイングランド北部からスコットランド、そしてアイリッシュ海へと展開したのに対し、デンマーク出身者の多くは、主としてイングランド南東部と現在のフランス北部に集中した。当時のヨーロッパの水準では卓抜した操船技術と船舶構造

20

ヴァイキング時代の デンマーク

——★スカンディナヴィア世界の先進地として★——

スカンディナヴィア史においては、通常八世紀末から一世紀半ばまでのおよそ二世紀半を、特別に「ヴァイキング時代」と呼ぶ。それは、スカンディナヴィア人が大々的に海外へ展開し、ヨーロッパ文明の航路に大きなうねりを生じさせた、歴史上注目すべき時代である。しかしながら、一口にヴァイキング時代といつても、彼らの故郷であるスカンディナヴィア世界は広大で、地域によって地理条件にも歴史過程にも大きな偏差がある。それでは、デンマークのヴァイキング時代とは、どのような時代であったのだろうか。

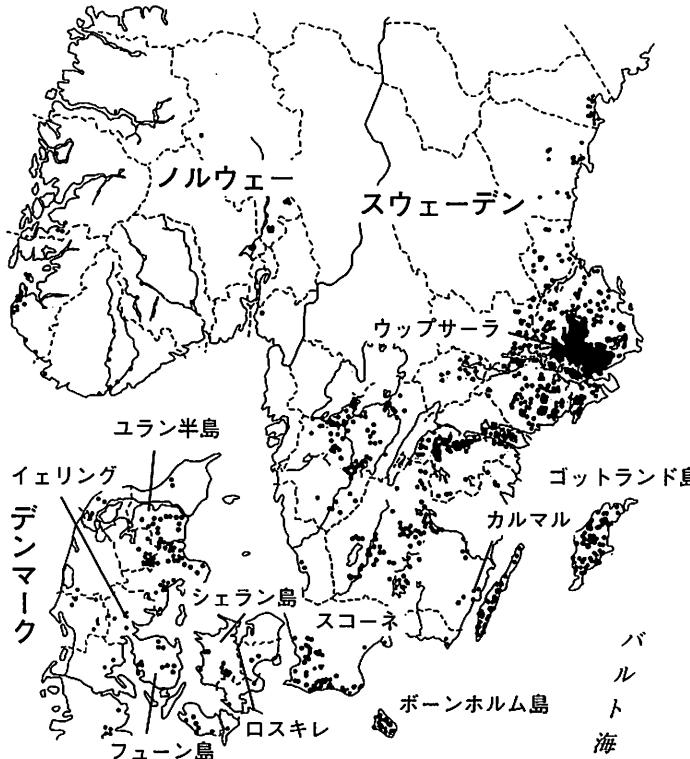
ヴァイキング時代から中世にかけてのデンマークは、現在のデンマークと異なり、ユラン半島と島嶼部に加えて、シュレー・スヴィヒ・ホルシュタインとスカンディナヴィア半島南端部を、その領域としていた。この前近代のデンマークという空間は、二つの点でノルウェーやスウェーデンと異なる独特的の歴史的環境が与えられていた。一つは自然地理的な側面である。このデンマークの大地は、峻険な山脈を背後に控えるほかのスカンディナヴィア地域とは異なり、標高は最高でせいぜい一七四メートルという平坦な土地柄であり、可耕地の割合が高かつた。

をわが物としていた彼らは、テムズ川やセーヌ川を遡行し、沿岸部にある教会、修道院、都市といった富の集積地を繰り返し略奪した。彼らの執拗な攻撃は、住人はもとより、時の歴史記述者を恐怖させ始めた。イングランド王権と深いつながりのある『アングロサクソン年代記』や、フランク王権の歴史記録である『フランク王国編年誌』や『サン・ベルタン編年誌』は、毎年のようにヴァイキングとの戦闘を記録している。

他方で、彼らのなかには現地への定住を求めるものも現れた。九世紀末、ヴァイキングの首領グスロムとイングランドのアルフレッド大王との間に締結された協定を機に、デンマーク・ヴァイキングによるイングランドへの定住活動は加速化し、イースト・アングリアからノーサンブリアにかけて、「デーンロー（デーン人の法）」と呼ばれるヴァイキングの定住地域が形成された。他方、対岸のフランク王国領においても、九一年、やはりヴァイキングの首領であつた口口なる人物が、西フランク王国のシャルル肥満王からノルマンディのルアン周辺に土地を授与された。これを核としてフランス北部にはノルマンディ公領が成立した。ただし、デーンローにせよノルマンディにせよ、デーン人の人口比はわずかであり、住民の大多数は現地民であつた点は留意しておくべきであろう。

九〇〇年頃を境に、彼らヴァイキングの海外展開活動はいつたん減速した。しかしながら、九八〇年頃、デーン人たちはイングランドへの襲撃を再開した。しかも、このヴァイキング襲撃の第二の波は、九世紀の襲撃よりも大規模でより組織的であった。デンマークのスヴェン双頭王は、九九一年、ノルウェー・ヴァイキングの一首領オーラヴ・トリュッギヴァソンとともに、イングランドへ上陸し、激しく攻勢をかけた。イングランド王権や都市当局は、彼らヴァイキングが襲撃を取りやめることを

スカンディナヴィア世界におけるルーン石碑の分布



出典：R. Palm, *Runor och regionalitet*. Uppsala 1992, s. 73.

条件に、研究史上デーンゲルトと総称されるきわめて高額の貢納金を支払うことがあつた。スカンディナヴィア世界でしばしば土中から発見されるイングランド貨幣のなかには、このデーンゲルトで得たものも含まれていると考えられる。スヴェンは一〇一二年にイングランドを征服したが急逝し、その後一〇一七年に彼の息子クヌート（クヌース）がイングランド王となる。彼らの活動については別の

項目に譲るが、クヌートの死後もデーン人

によるイングランド襲撃は続き、その動きが終息するのは、ノルマンディ公ギヨームが、ウイリアム一世として一〇六六年にイングランド王に即位する前後を待たねばならない。

このように、海外において顕著な活動を示すデーン人であつたが、他方でデンマーク内部においても、以前とは様相を異にした社会が形成されつつあつた。その原因としてキリスト教化や都市化などさまざまな側面における変動を指摘できるが、ここではルーン石碑の建立運動を見ておきたい。

者を追悼する短い文章が銘刻された顕彰碑文である。多くは「AがBを記念してこの石を建てる」といった定型文であるが、なかには美しい装飾文様が描かれているものもある。スウェーデンの歴史家B・ソーヤーのカタログによれば、スカンディナヴィア全体で三〇〇〇基ほど、そのうちボーンホルム島を含めたデンマークには二〇〇基が残っている。実際に興味深いことに、これらの石碑は紀元一〇〇〇年前後という特定の時代に集中して建立されている。それはなぜか。B・ソーヤーは、建立者が死者との関係に必ず言及していることに注目し、石碑は死者を顕彰すると同時に、その建立者と死者との関係を周囲に認知させる機能があると主張した。なぜそのような認知が必要なのか。それは建立者が、死者の持っていた権利、たとえば土地の所有権などの正当な後継者であることを主張しておかねば、権利の侵害が起きたからである。つまりこの石碑は、死者のためであると同時に、生者のためでもあったのである。紀元一〇〇〇年前後のデンマークは、キリスト教化、都市化、度重なる戦闘での死者の増加、イングランドからの富の流入など、さまざまな局面で社会が激しく変化する最中にあつた。ルーン石碑の建立運動は、そのような社会変動に対する一つの解答であつたのかもしだい。

ヴァイキング時代のデンマークは、大陸やイングランドとの頻繁な交渉を通じて、ほかのスカンディナヴィア地域よりも深甚にヨーロッパ文明の影響を受けていたことは間違いない。その結果デンマーカは、「キリスト教世界」という当時のヨーロッパ国際社会に、ノルウェーやスウェーデンに先駆けて参与することになつたと言つてもよいだろう。

（小澤 実）

ゴーム老王

メロヴィング時代以来、フランク王国の史料には少なからぬ「デーン人の王」を確認することができるが、デンマーク全体を統一し、領域性を持つた国家を建設したのは、ユラン半島の中部を拠点としたイエリング王権が最初である。

イエリング王権の開祖はゴーム老王（九五八年死去）と呼ばれた。彼の出自は不分明であり、当初から王というに相応しい力を持っていたわけではない。それどころかデンマーク各地には、王に匹敵する、場合によつては王よりも力を持つ在地有力者が割拠していた。しかしながら彼は、そうした在地有力者の一人の娘チューラと結婚して権力基盤を固め、徐々にその権勢の及ぶ範囲を拡大した。少なくとも彼の治世期において、ユラン半島からフューン島にかけてのデンマーク西部は、イエリング王権の影響下にあつたと考えられる。彼は妻チューラのためにイエリングに小石碑を建立し、彼女を「デンマークの誉れ」とたたえた。それはゴームにとつて妻の持つ力がどれほど大きなものであつたのかを反映していたといえる。